

## ステッキ

中央区・清滝支部 小田原良治  
(小田原病院)

十数年前、東京でステッキを買った。ちょっと奮発して、気に入りのものを買ったのである。気が向いた時に、時々持ち歩いた。「杖、どうかしたんですか？」知り合いに、よく尋ねられた。「これは、『杖』じゃない。『ステッキ』、日本語じゃ『素敵』という」と言っていたものである。最近、持ち歩いても何も尋ねられない。これもちょっとさびしい。そのような年令と思われているのであろうか。

妻が上京した。休日に一人である。ふと思いついて、城山に登ってみようと思った。一月ほど前、久しぶりに妻と二人で城山に登った。その時、手頃な散歩コースだなと思ったこともあったので、寸足らずのジーパンにジャケット、ステッキを手にして颯爽と出かけて行った。お決まりのスタイルである。ファッション性は全くない。ただ、着やすい、歩きやすいというだけである。

様変わりした旧医学部跡を右手に見ながらステッキとなかよく、気ままな散歩感覚で坂道を登って行った。旧冷水水道の近衛の水を過ぎ、ひんやりとした空気を吸いながら、木漏れ日の中を歩いて行く。「おれも、なんと風流な」と自画自賛しながら登って行ったが、すぐに息が切れてきた。素敵なステッキ姿というものではない、まさに杖に頼ってという格好になってきた。遠いなあ。先日、妻と二人で登った時には、遠いと感じなかったのに。今日の城山は遠い。ステッキ君、君だけが相手ではだめだ、山登りは「連れ」が大事だ。そう、「つま」ではなく「つれ」が大事だ。

何となく人生を感じたような気がした。

ステッキを杖にゆるゆると、肩で息をして登る私を、若い男女が、軽やかに追い抜いて行った。えっ、女が男の肩を抱いている。世の中かわったな～、今からこれじゃ、将来が見えるようだと負け惜しみをつぶやきながら、どんどん遠ざかって行く男女の後から、ゆるりゆるりと登って行った。

展望台に着いた。桜島が美しい。鹿児島はいいなあ、やはり、桜島だ。煙を吐く桜島を見ながら思った。今日はよく歩いた、スマホを開いて歩数を調べた。5000歩、えっ、5000歩？、5000歩しかないのか。一万歩を期待してスマホを見たのに、がっかりである。登った道は下りなければならない。呼びかけた。「ステッキ君、帰りは、バスにしよう」。